

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.271

2015年12月

第11回名古屋大学ホームカミングデイを開催



目次

●ニュース

第11回名古屋大学ホームカミングデイを開催	3
ウズベキスタンにおいて日本法教育研究センター開所10周年・サテライトキャンパス開校記念式典等を挙	7
ジョイント・ディグリープログラムキックオフシンポジウムを開催	8
地震防災訓練を実施	9
あいちサイエンスフェスティバル2015を開催	10
平成27年度日本数学コンクール表彰式を挙	11
第50回経営協議会を開催	11
岡崎恒子名誉教授が文化功労者として顕彰される	12

●知の未来へ

グラフ内の点を見てまわる旅	13
---------------	----

藤江 双葉（大学院多元数理科学研究科准教授）

●知の先端

アミノ酸の生理機能—分岐鎖アミノ酸を中心として	14
-------------------------	----

下村 吉治（大学院生命農学研究科教授）

●部局ニュース

未来材料・システム研究所看板除幕式を挙	16
---------------------	----

宇宙地球環境研究所設立記念行事を挙	17
-------------------	----

「中国人作家・郁達夫八高入学100周年」記念行事を開	18
----------------------------	----

第29回国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウムを開	18
----------------------------------	----

第2回フライブルク大学・阿德レード大学・名古屋大学（FAN）大学間国際	19
-------------------------------------	----

共同シンポジウムを開催

モンゴル科学技術大学外国語学部一行が訪	19
---------------------	----

第37回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開	20
-----------------------	----

第114回防災アカデミーを開	20
----------------	----

第47回地球教室を開	20
------------	----

全学構成員対象 FD・SD「障害者差別解消法と合理的配慮」を開	21
---------------------------------	----

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成27年10月16日～11月15日	22
-----------------------------------	----

●イベントカレンダー	25
------------	----

●ちょっと名大史

八高・旧教養部の面影を名市大にたずねて	28
---------------------	----

第11回名古屋大学ホームカミングデイを開催





第11回名古屋大学ホームカミングデイが、10月17日(土)、東山キャンパス及び大幸キャンパスにおいて開催されました。前日からの雨の予報とは打って変わり、当日は一日を通して秋晴れとなり、汗ばむ陽気でした。

「ホームカミングデイ」という言葉には、「故郷に帰る」という意味が込められており、同窓生が母校に集うだけでなく、在学生の家族や教職員OB、地域の方々にも「大家族」として本学との絆を深めてもらうための場として、平成17年から毎年10月の第3土曜日に開催しています。

今年も、中心部局を工学研究科とし、メインテーマを、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」に採択された「21世紀、Sustainableな世界を構築するアジアのハブ大学」という構想名から、「Sustainable」というキーワードを用い、「持続可能社会の実現に向けて」としました。

当日の運営は、教職員とともに、名大祭本部実行委員会、TEDxNagoyaU 実行委員会及びサッカー部に所属する学生が、来場者への応対、駐車整理などの業務にあたり、各部局においても、教職員と学生が行事を運営し、同窓生や在学生の保護者の皆様をお迎えしました。

当日は、4,700名を超える来場者が足を運び、来場者記念品として、ホームカミングデイガイドブック等の入った特製のバッグと、「ミネラルウォーター・名大ラベル」を配付しました。



■学術講演「世界を照らすLED」

午前中には、豊田講堂ホールにおいて、天野 浩未来材料・システム研究所教授が、「世界を照らすLED」と題して学術講演を行いました。開演前から、豊田講堂の入口には、多くの方が列を作り、約900名の来場者に、予定座席はほぼ満席となりました。工学研究科社会連携委員会委員長である山田陽滋教授が司会を務め、はじめに、新美工学研究科長からのあいさつと天野教授の略歴紹介がありました。次いで、天野教授が、昨年のノーベル物理学賞受賞にまつわる貴重なエピソードを中心に、ユーモアを交えながら講演を行いました。

また、関連企画として、豊田講堂ホワイエでは、工学部・工学研究科の学科等、技術移転候補を紹介するパネル展示のほか、昨年のノーベル物理学賞受賞関連の写真パネルやデモ機等の展示を行い、多数の方が足を運びました。

そのほか、ノーベル賞関連施設である赤崎記念研究館展示室、2008ノーベル賞展示室、野依記念物質科学研究館2階ケミストリーギャラリーにも、多くの方が来館しました。

■名古屋大学の集い

午後からは、豊田講堂ホールにおいて、卒業後10周年、20周年、30周年、40周年、50周年を迎えた周年同窓生の方を中心に、「名古屋大学の集い」を開催しまし

	2	3
1	4	

- 1 ホームカミングデイの開催を伝える大看板
- 2 総合案内所にてスタッフから記念品を受け取る来場者
- 3 学術講演「世界を照らすLED」
- 4 豊田講堂ホワイエの様子



た。教育学部卒業生である東海テレビ放送の浦口史帆アナウンサーが司会進行を務めました。はじめに、松尾総長、豊田章一郎全学同窓会会長からあいさつがあり、次いで、伊藤義人全学同窓会代表幹事・ホームカミングディレクターから、全学同窓会の活動報告が行われました。続く「名古屋大学国際交流貢献顕彰授与式」では、ブンフェーン・プームマライシット名古屋大学全学同窓会ラオス支部長、リン・ホン清華大学教授、ジョセフ・サベドロ・マサンカイ フィリピン大学ロスマニョス校獣医学部名誉教授の3名に、国際的な取り組みに対する功績を称え、表彰状と記念品が授与されました。

授与式終了後には、名古屋フィルハーモニー交響楽団によるコンサートを開催しました。理学部卒業生である内藤 彰氏を指揮者に迎え、ソリストには、百々あずさ氏を迎えました。内藤氏は、現在、東京ニューシティー管弦楽団名誉音楽監督・常任指揮者を務め、作曲家の自筆譜に忠実に基づく演奏の再現にこだわり、自身による楽譜の新改訂版を出版するなど、精力的に活動を行っています。また、百々氏は、愛知県出身のソプラノ歌手で、現在はベルリンに在住し、ヨーロッパを中心に活躍しており、地元である愛知県でも度々公演を開いています。今回のコンサートではアンコールを含め、全11曲が演奏されました。



■名大生サークルによるミニコンサート

シンポジオンホールでは、フォルクローレ同好会、名古屋アカペラサークル JP-act の2つの学生サークルによるミニコンサートを開催しました。フォルクローレ同好会は、個性豊かな南米アンデス地方の民族楽器を使用し、哀愁漂う独特のメロディを奏でました。JP-act は、馴染みのある J-POP の曲を中心に、グループごとに息の合った歌声を披露し、来場者を楽しませていました。

■施設公開「ナショナルイノベーションコンプレックス (NIC)」、女性卒業生向けキャリア支援企画「名大・マカフェ」

今年3月に完成したナショナルイノベーションコンプレックス (NIC) では、最新の施設を公開し、工学研究科附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター、同研究科附属プラズマナノ工学研究センター、情報科学研究科附属組込みシステム研究センター、未来社会創造機構、予防早期医療創成センター、学術研究・産学官連携推進本部の6つの組織の活動紹介及び展示が行われ、約400名の来場者がありました。

3階多世代共用スペースでは、男女共同参画室、学生相談総合センター、未来社会創造機構社会イノベーションデザイン学センター、ビジネス人材育成センター (B-jin) の主催により、女性卒業生向けキャリア支援企画「名大・マ





マカフェ」が開催されました。妊娠中・育休中・育休復帰後のそれぞれの時期にある本学卒業の女性同窓生が、仕事と育児の間で抱える悩みを共有し、交流するというテーマの下、先輩ママからの経験談の紹介や、男性からの意見も交えながら意見交換を行いました。子ども連れで参加できるアットホームな雰囲気も好評で、34名の参加がありました。

■体験企画「あかりんご隊科学実験『入浴剤を作ろう☆』」、「名古屋グランパス・スクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室」

「あかりんご隊科学実験」及び「名古屋グランパス・スクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室」は、毎年人気の小学生向けの企画です。今年も、募集人数を超える多数の申し込みがありました。

本学の理系女子学生で構成される「あかりんご隊」が、子どもたちに実験の楽しさを伝える企画を考え、今年のテーマを『入浴剤を作ろう☆』としました。野依記念学术交流館1階カフェスペースにおいて、あかりんご隊が実験方法を説明し、保護者の方に見守られながら、子どもたち自身で実験に挑戦しました。重曹とクエン酸を混ぜて作成した手作りの入浴剤はお土産として持ち帰ることができ、参加した子どもたちは嬉しそうに持ち帰りました。

陸上競技場では、名古屋グランパス・スクールコーチの



指導の下、サッカーの基本プレイを学び、ミニゲーム等を行いました。子どもたちだけでなく、保護者の方の笑い声もたくさん響き、広大な人工芝の上で思い切り身体を動かし、怪我もなく、親子のふれあいを楽しむ様子が見られました。

■見学ツアー「超高压電子顕微鏡施設」、「スーパーコンピュータ」

未来材料・システム研究所による超高压電子顕微鏡施設見学ツアーも毎年人気の企画であり、今年も300名を超える申し込みがありました。参加者は、地面からの高さが10mにもなる「反応科学超高压走査透過電子顕微鏡 JEM-1000K RS」を間近に見ながら、熱心に説明に耳を傾けていました。

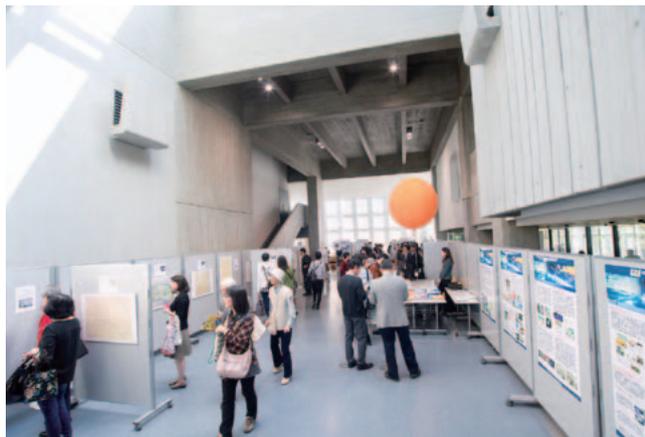
情報基盤センターにおけるスーパーコンピュータの見学ツアーには、200名の来場者がありました。9月に更新披露式が行われたばかりである最新型スーパーコンピュータFX100の一般公開のほか、3Dプリンタで作成した臓器モデルに触れる体験等、様々な最新の情報処理技術を学ぶことができました。

■博物館企画、古川記念館「年代測定装置の見学」

博物館では、常設展のほかに、「博物館収蔵品大公開！動物組織、骨格標本、明治の博物画」、「ミクロの探検隊®」

1	2	5	6
3	4	7	

- 1 国際交流貢献顕彰授与式
- 2 名古屋フィルハーモニー交響楽団によるコンサート
- 3 アカベラサークル JP-act によるミニコンサート
- 4 「名大・ママカフェ」
- 5 あかりんご隊科学実験「入浴剤を作ろう☆」
- 6 超高压電子顕微鏡施設見学ツアー
- 7 「ムシの切り紙」実演の様子



の企画が行われました。野外観察園では、切り紙作家石川進一朗氏による「ムシの切り紙」の実演が行われ、1枚の紙から標本と見紛うような非常に精巧な立体のムシを作り出す妙技に、参加者は感心した様子でした。

また、古川記念館では、年代測定装置の見学が行われ、参加者は興味深そうに説明を聞いていました。

■豊田講堂2階ギャラリー展示企画

豊田講堂2階ギャラリーでは、今年10月に設立された宇宙地球環境研究所及び未来材料・システム研究所の研究内容の展示、博士課程教育リーディングプログラムの活動紹介が行われ、来場者に熱心に説明をするスタッフの姿が見られました。大学文書資料室による企画展「地図・図面で見える名大キャンパスの歴史」では、キャンパスでの思い出を懐かしむ同窓生の声が聞かれました。

■販売コーナー

豊田講堂南側ピロティの販売コーナーでは、本のリユース市、農産物の販売、大学生協による名大グッズ等の販売が行われました。毎年販売開始前から行列ができる本のリユース市では、学術書など手に入りにくい図書が安価に入手できることもあり、今年も多くの方が本を購入しました。農産物の販売では、生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター東郷フィールド内の大地で育てられた



新鮮な野菜や果物、お米が販売されました。

大学生協による名大グッズ等の販売では、天野教授の講演終了後に、LEDソーラーライト等のLEDグッズを買い求める方が多くみえました。また、お土産には、名大あめやチョコレート、ゴルフ等のお菓子が人気でした。

■その他各学部・研究科主催行事等

各学部・研究科においては、市民公開講座、同窓会関係行事、在学生の保護者向け行事等が企画されました。

多彩な分野の講演タイトルが出揃った市民公開講座等には、現役の教員だけでなく、名誉教授や同窓生を講師に迎え、同窓生だけでなく一般の方も楽しめるよう講演内容に工夫が凝らされていました。

また、保護者向け行事として、各学部・研究科ごとに、教育・研究内容の紹介や進路・就職状況について説明があり、保護者からの質疑応答や個別相談も行われました。保護者向け行事に参加した方には、日頃、在学生が食べている大学生協食堂の食事の提供も行いました。

その他にも、在学生や保護者向けの企画としてES総合館1階会議室で行われた「就サポOB・OG座談会～これからのキャリアについて共に考える～」では、本学OB・OGによる就活サポーターと在学生の参加者による座談会が開催されました。野依記念学术交流館1階では、「海外留学プログラム説明会」が行われ、留学に関する本学の取り組みに関する紹介や個別相談が行われました。

参加された多数の方に、楽しい1日を過ごしていただき、ホームカミングDayを通じて、本学との繋がりをより一層深めてもらう機会となりました。

1	2
3	

1 豊田講堂2階ギャラリーの様子

2 本のリユース市

3 法学研究科講演会の様子

ウズベキスタンにおいて日本法教育研究センター開所10周年・サテライトキャンパス開校記念式典等を挙行政



日本法教育研究センター10周年、サテライトキャンパス開所式典の様子

ウズベキスタン日本法教育研究センター10周年及びウズベキスタンサテライトキャンパス開校記念式典が、10月25日(日)、ウズベキスタン・タシケントの国際ナショナルビジネスセンターにおいて挙行政されました。

ウズベキスタンでは、大学院法学研究科が1990年代から中央アジアを含むアジア諸国を対象とした法整備支援事業を展開してきました。「日本法教育研究センター」は、学部生に対して日本語による日本法教育を提供する組織として、大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター(CALE)により、2005年9月、タシケント国立法科大学に開設されました。同センターは、ウズベキスタンにおいて法整備を自律的に推進できる若い世代の人材を育成しており、修了生の多くは、公務員、大学教員、弁護士等として活躍しています。今回の式典は、同センターの開所10周年及びアジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスの開校を記念するものです。アジアサテライトキャンパスでは、各国の政府等機関の幹部及び将来のナショナル・リーダーとして活躍が期待されている若手人材等を対象とし、現地に設置されたサテライトキャン



経済フォーラムの署名式の様子



安倍総理大臣の経済ミッションに同行した松尾総長(右)、市橋理事(中央左)、小畑CALEセンター長(左)

パスと本邦キャンパスとの連携による博士課程プログラム「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」を実施していきます。ウズベキスタンでは大学院法学研究科及び大学院医学系研究科が博士課程プログラムを提供する予定です。

式典では、松尾総長からのあいさつの中で、本学のウズベキスタンにおけるこれまでの取り組み、今後の展望が紹介されました。来賓として、ウスマノフ・アンバル・アクラモヴィッチ ウズベキスタン司法省副大臣をはじめ、山脇良雄文部科学省国際統括官、カニヤゾフ・イエセムラト・スルタムラドヴィッチ タシケント国立法科大学長、アリエフ・マンノン・ガファロヴィッチ ウズベキスタン共和国大統領直属国家行政アカデミー学長等、政府機関や大学関係者を含め約180名が出席し、本学に対する期待や関心の高さがうかがえました。また今回、本学は、同じくウズベキスタンを訪問した安倍晋三内閣総理大臣の経済ミッションにも同行しました。同日の午前には、総長が、大統領公邸で行われた安倍総理大臣とイスラム・カリモフ ウズベキスタン共和国大統領との首脳会談に同席しました。会談の席上、総長は、本学がウズベキスタンで行っている取り組みについて紹介をしました。

さらに、今回のウズベキスタン滞在中には、本学・筑波大学・タシケント工科大学間で、「タシケント工科大学との研究協力に関する協定」も締結しました。この覚書は、日本とウズベキスタンの政府間合意に基づき、タシケント工科大学「イノベーションセンター」設立に協力していくものです。本協定締結については、午後から行われた「日本・ウズベキスタン・経済フォーラム」の署名式の中で、安倍総理大臣のウズベキスタン訪問中に締結された協定の1つとして紹介されました。

今回のアジアサテライトキャンパスの開校は、安倍総理大臣のウズベキスタン訪問の意義・主な成果の1つとして共同記者発表で紹介されるなど、本学にとって非常に意義深いものになりました。

ジョイント・ディグリープログラムキックオフシンポジウムを開催



来賓あいさつをする田浦文科省国際戦略分析官

ジョイント・ディグリープログラムキックオフシンポジウムが、10月16日(金)、理学南館坂田・平田ホールにおいて開催されました。本シンポジウムは今年6月、大学院医学系研究科が豪州アデレード大学健康科学部と「名古屋大学・アデレード大学国際連携総合医学専攻」、いわゆるジョイント・ディグリープログラム(JDP)を我が国で初めて開設したことを記念して開催され、学外者50名以上を含め、190名以上の関係教職員・学生が参加しました。

開会にあたり松尾総長より、JDP設置にあたり尽力した本学の関係者に対する慰労とともに、アデレード大学への感謝の意が述べられました。また、本学のJDPは今回がゴールではなく、今後も様々な分野でJDPを実施していきたいという意気込みが述べられました。

次に、来賓として田浦宏己文部科学省高等教育局国際戦略分析官よりあいさつがあり、「今後計画をしているプログラムも含め、JDPの成否に名古屋大学のスーパーグローバル大学創成支援事業構想の命運がかかっていると言っても過言ではない、前例がない取り組みで困難も予想されるが、軌道に乗せてほしい」と本学への期待が述べられました。



パネルディスカッションの様子

続いて、高橋医学系研究科長から、JDPの意義や実施方法等についての説明があり、引き続きアレスター・パートアデレード大学健康科学部長が登場し、リチャード・ラッセル同大学副学長補佐によるビデオメッセージにより、JDPに関する詳細な説明がありました。その後、今後の開設を計画しているJDPについて、大学院理学研究科、大学院生命農学研究科及び海外大学関係者がそれぞれの取り組みを発表しました。大学院理学研究科については、阿波賀同研究科副研究科長及びエレノア・キャンベルエジンバラ大学化学科長より、大学院生命農学研究科については、川北同研究科長及びグンジャンナ・セラグールカセサート大学大学院長より、今後の計画等について説明がありました。

さらに、「今後のJDPの展開について」と題し、本学及び海外大学の関係教員との合同パネルディスカッションが行われました。前述の3大学のほか、フライブルク大学及びノースカロライナ州立大学の関係者も交え、学生にとっての利点、設置や実施にかかる課題等、JDPについて多岐にわたる有益な意見交換が行われました。

本学のインターナショナルアドバイザーボード(IAB)であるモンテ・カセム立命館大学国際平和ミュージアム館長より、本学はJDP設置を成し遂げた優れた模範であり、今回のシンポジウムのように他大学にも経験を共有することは大変意義がある、と講評が述べられました。

閉会の辞において國枝理事より、教育研究の水準を高めるために、JDPの数を更に拡大するという大きな目標の達成に向けた強い意気込みが述べられました。また、JDP拡充のために、JDPそれぞれに専攻の設置が必要となる現在のルールに柔軟性を持たせてほしいという、制度に対する提案もありました。学外からの来場者やJDPに入学を考える学生からの質問や意見も活発で、大変有益なシンポジウムとなりました。

地震防災訓練を実施

名古屋大学地震防災訓練が、10月28日(水)に実施されました。昨年から、原則として毎年10月28日に実施することとしましたが、この日は1891年の濃尾地震、1707年の宝永地震が起きた日であり、東海地域の防災において重要な日となっています。

今年は、全学一斉避難訓練、自衛消防隊の活動訓練、災害対策本部の訓練に加えて災害対策部局本部訓練、安否確認訓練を実施しました。また、各ブロックでは独自訓練などが行われました。

全学一斉避難訓練は、午前11時30分に緊急地震速報が放送され、続いて震度6強の強い揺れが継続することを示す地震の音が約2分間流れました。この間、全員が机の下などで安全を確保する行動を行い、揺れが収まった後に屋外の一次避難場所に避難して、最後に避難者確認と指示などが行われました。これまで、訓練時の危険性を考慮して全館一斉の避難訓練を実施していなかった全学教育棟に関しても、今年は事前準備や独自の誘導・安全確保の体制を整備した上で、全館一斉避難訓練を行いました。また、昨年引き続き、授業中の教員や研究室の教職員による適切な



避難訓練の様子



災害対策本部会議の様子

避難誘導と、一次避難場所での避難者確認を重点課題としました。訓練は全体にスムーズに実施され、課題となっていた全学教育棟についても混乱することなく避難が行われました。今年の一斉避難訓練では全学で約1万人の避難者が確認され、活動中の自衛消防隊員や諸事情で安全確保行動のみの訓練を行った人数を加えると1万1千人以上の参加となり、これまでの最多避難者数となりました。

2点目の自衛消防隊の活動訓練は、本学の特徴であるブロック自衛消防隊（本部隊と各建物隊）の行動の確認を目標とし、昨年度に作成された、自衛消防隊員の具体的な行動内容をまとめた「災害時対応の手引き」による訓練が実施されました。ブロック自衛消防隊を中心にした訓練はここ5年ほど改良を加えながら実施されてきたため、どのブロックも充実した訓練が実施されるようになってきています。

3点目の災害対策本部の訓練は、免震装置を備え、非常時の電気、水、ガス、通信・放送設備、食料などが確保されている減災館で実施されました。今年の訓練は、地震発生直後に、総長をはじめとする災害対策本部員と全学自衛消防隊員が減災館に集合して災害対策本部会議を立ち上げ、大学全体の被害状況を把握し、対策を検討する手順の確認に重点を置きました。また今回は、重症の負傷者がいるという救護センターからの報告に基づいて名古屋第二赤十字病院に実際に連絡する訓練も初めて実施しました。

4点目の災害対策部局本部の訓練は、各部局の長などにより、災害時の部局の行動を確認するために行われました。

5点目の安否確認訓練は、昨年度から部局ごとに検討してきた「安否確認実施要領」を訓練によって確認する目的で実施され、各部局で一次避難場所での避難者確認の結果と安否確認システムの入力結果を統合するなど、災害時を想定した安否確認を行いました。

今後は、担当者のヒアリングや実施報告、参加者のアンケートなどに基づいて課題整理を行い、継続的な安全対策につなげていきます。

あいちサイエンスフェスティバル2015を開催

あいちサイエンスフェスティバル（ASF）2015が、9月19日（土）から11月3日（火・祝）の期間、愛知県全域及び岐阜県・三重県の一部地域で開催されました。今年で5年目を迎えるこの催しは、この地域にサイエンスやものづくりを気軽に楽しむ文化を育むため、人々の交流と対話を生み出すことを目的に開催しています。東海3県の大学や科学館・博物館等と連携する「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」（現在26機関）の協力により、今年は全90件のサイエンスイベントを実施し、約20万人が参加してサイエンスを楽しみました。

主催者である本学では、学術研究・産学官連携推進本部内の事務局企画として、20件のイベントを開催しました。

まず9月19日（土）には、オープニングイベントとして、2つの講演会を開催しました。午前中の第1部では、中村桂子JT生命誌研究館館長による講演会「科学者が人間であること－生命誌をつむぎ、未来を想う」を開催しました。講演会後半では、本学の若手研究者3名（中 竜大素粒子宇宙起源研究機構特任助教、教育発達科学研究科博士課程後期課程3年内田康弘さん、生命農学研究科博士課程前期課



講演する伊丹教授



化石発掘ツアーの様子

程2年萩尾華子さん）が中村館長と共に、現代社会の課題に科学者としてどう向き合うかについて対話しました。

午後からの第2部では、伊丹トランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）拠点長による講演会「世界を変える分子を創る！－生物学と化学のMIX ラボがすごい」を開催し、分子研究の社会的意義やITbMの先進的取り組みについて講演しました。

また、9月29日（火）から10月29日（木）の期間中の平日夜には、研究者と市民の小規模での対話を目的とした「ASFサイエンストーク」を名古屋市中区の栄地区近辺の飲食店や図書館等を会場に週3回、計15回開催しました。ネットワーク参加機関の研究者のほか、本学からは、杉谷健一郎環境学研究科教授、村瀬 洋情報科学研究科教授、町田 健文学研究科教授、瀬川泰知理学研究科特任助教、須藤 斎環境学研究科准教授が、講師として登壇しました。

さらに、9月25日（金）には、横山 智環境学研究科教授による「名大カフェ」、10月18日（日）には氏原 温環境学研究科准教授による「化石発掘ツアー」を開催し、定員以上の参加となる盛況ぶりでした。

最後に、11月1日（日）にはクロージングイベントとして、今年が国際光年であることを記念した「未来社会でのひかり－光の研究最前線」を開催し、川瀬晃道工学研究科教授、竹岡敬和工学研究科准教授、永江峰幸シンクロトン光研究センター助教が、それぞれ光にまつわる先端研究を紹介しました。

なお、今年は7月25日（日）から8月9日（日）の間、主に子ども向けの「夏休みあいちサイエンスフェスティバル2015」を初めて開催しました。全57件のイベントに16万人を超える参加がありました。本学事務局主催・共催企画には、清河幸子教育発達科学研究科准教授、馬場嘉信工学研究科教授、梶村 恒生命農学研究科准教授、瀬上紹嗣生命農学研究科特任助教が登壇し、小学生から高校生までの子どもたちに、サイエンスの面白さを伝えました。

平成27年度日本数学コンクール表彰式を挙行

平成27年度日本数学コンクール表彰式が、11月3日(火・祝)、野依記念学术交流館において挙行されました。

今回は、受賞した生徒とその保護者等、約100名が出席しました。

表彰式では、はじめに日本数学コンクール委員会委員長を務めている國枝理事、前田憲一愛知県教育委員会高等学



あいさつする國枝理事

校教育課指導主事があいさつを行いました。次に、8月9日(日)に名古屋・大阪・三重・和歌山・福井の5会場で行われた第26回日本数学コンクール個人戦・団体戦、第19回日本ジュニア数学コンクール個人戦・団体戦で優秀な成績を収めた74名、及び第16回日本数学コンクール論文賞で優秀な論文を作成した6組(6名)に対し、國枝理事から賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、日本数学コンクール個人戦及び団体戦のシニア大賞、日本ジュニア数学コンクール個人戦及び団体戦のジュニア大賞、日本数学コンクール論文賞のシニア金賞を受賞した生徒から受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

表彰式終了後には、問題作成に携わったコンクール実行委員の先生が、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方について、生徒と会話しながらポスターセッション形式で解説が行われました。

第50回経営協議会を開催

第50回経営協議会が、11月10日(火)に開催されました。

会議では、松尾総長からあいさつの後、本学の教育研究組織再編について意見交換が行われ、外部委員の方々から多くの貴重な意見が寄せられました。

次いで、第3期中期目標・中期計画について、総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承



会議の様子

されました。

また、本学における教育・研究活動の現状として、平成26年度に係る業務の実績に関する評価結果、平成27年度人事院勧告の内容と課題、平成28年度概算要求、名古屋大学財務レポート2015、平成27年度国際プログラム群入学試験の結果、GaN研究コンソーシアムの設立、名古屋大学・東海地区大学広域ベンチャーファンドの創設、大幸団地整備計画、名古屋大学基金の状況及び第11回ホームカミングデイについて報告が行われました。

岡崎恒子名誉教授が文化功労者として顕彰される

平成27年文化功労者・文化勲章受章者が発表され、本学関係者では岡崎恒子名誉教授が文化功労者として顕彰されました。文化功労者は、文化勲章に次ぐ栄誉であり、日本において、文化の向上発達に関し多大な功績を残した者に贈られます。

岡崎名誉教授は本学理学部在籍時に故岡崎令治教授と



岡崎名誉教授

もに、「岡崎フラグメント※」を発見、長年にわたり分子生物学の振興と優秀な分子生物学者の育成に尽力されてきました。

なお、文化功労者顕彰式は11月4日(水)、東京都内のホテルにおいて執り行われました。

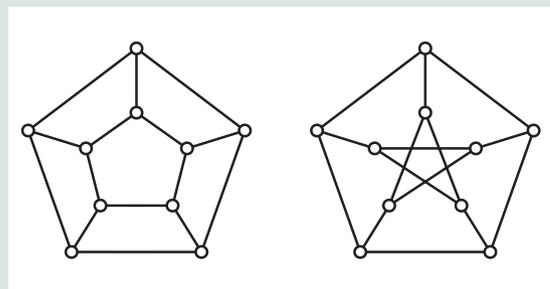
※岡崎フラグメントは、遺伝情報を担うDNAの複製の鍵を握る、短いDNAです。岡崎名誉教授らは、DNAの複製過程において、短いDNAが次々と合成・連結され、長いDNA分子になることを発見しました。

グラフ内の点を見てまわる旅

藤江 双葉
大学院多元数理科学研究科准教授

鉄道の路線図では駅と駅のつながり方が重要な情報で、実際の駅間の距離などは省略して描かれます。グラフ理論で扱うグラフとは「どの点とどの点が隣接しているか」に着目して抽象化された、点の集合とそれらを結ぶ辺の集合からなる「図」のことです。

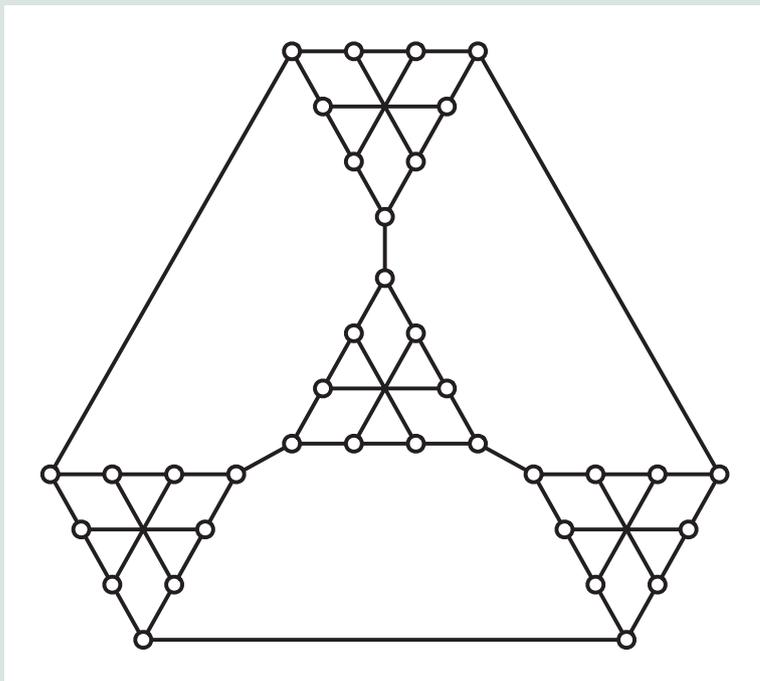
グラフについて考えたい問題のひとつに「ハミルトンサイクル（グラフ内のある点からスタートして、辺を辿りながら各点をぴったり一回ずつ拾ったのち最初の点に戻るような閉路）が含まれるか」が挙げられます。最初の点に戻るという条件を外したハミルトンパスの存在を考えることもあります。手で描けるくらい点の数が少ないグラフは別として、一般に、与えられたグラフがそのようなサイクルやパスを含むか判定することは非常に難しいことが知られています。



ハミルトンサイクルを含むグラフ（左）とハミルトンパスを含むがハミルトンサイクルは含まないグラフ（右）。

ハミルトンサイクル（パス）の有無を調べることは、すべての点を拾うためのコストを考えることにつながります。路線図で言えば、全駅を訪問して最初の駅に戻って来るためにトータルで何駅分移動すれば良いのか。最初の駅に戻る条件を外すとどうなるか。後者の場合はどこをスタート駅とするかも関係してきます。A駅はB駅よりも先に訪問しなくてはならない、などの条件がつくこともあるでしょう。私はこのような状況をグラフ理論の問題に落とし込んで数学的に定義・数値化することで、すべての点を拾うためのコストの観点からグラフを研究しています。

グラフが運よくハミルトンサイクルを含んでいるとして、実際にそのようなサイクルを作る際にはまた注意が必要です。どの点からスタートするかは問題になりませんが、どの辺から辿り始めるかは非常に重要です。最初から最後まで適当に辺を辿ったとしても必ずハミルトンサイクルができるようなグラフには3タイプしかないことがわかっています。辿っていく辺のうち最初の何本目までは適当に選んでも大丈夫なのか。それはグラフの何に左右されるのか。グラフの点ひとつひとつを拾うように、問題ひとつひとつを解決しながらグラフの研究の旅はこれからも続いていきます。



どの点を始点としても、いちばん効率良くすべての点を拾うために37辺分の移動が必要なグラフ。点は全部で36個あるため、ハミルトンパスやハミルトンサイクルは含まれないことがわかる。

アミノ酸の生理機能—分岐鎖アミノ酸を中心として

下村 吉治 大学院生命農学研究科教授

タンパク質を構成するアミノ酸と遊離アミノ酸

私たちの身体を作っているタンパク質は、20種類のアミノ酸が様々な組み合わせによって直線的に繋がることによって出来上がっています。このタンパク質は、筋肉や髪の毛を構成するタンパク質のように繊維状の構造や、多くの酵素（化学反応の触媒）のように球状の構造のものまでいろいろありますが、それらの形態を決定するのがアミノ酸の種類とその配列です。したがって、タンパク質の機能はアミノ酸によって決定されると言えるでしょう。

表1 筋組織の遊離アミノ酸濃度

アミノ酸	濃度 (μM 細胞内水)
ロイシン	225
イソロイシン	110
バリン	320
トレオニン	770
ヒスチジン	430
フェニルアラニン	85
メチオニン	60
リシン	1,110
アルギニン	680
アラニン	2,860
アスパラギン酸	1,650
アスパラギン	420
オルニチン	350
グルタミン酸	3,960
グルタミン	19,970 (37%)
グリシン	1,660
セリン	900
タウリン	17,680 (33%)
チロシン	122
合計	53,362

上段に必須アミノ酸、下段に非必須アミノ酸を示す。
筋肉の細胞内の水分量：約0.7 L/kg 組織。

データは、Rennie MJ. Influence of exercise on protein and amino acid metabolism, In: Handbook of Physiology. Rowell LB, Shepherd JT, eds, Section 12: Exercise: Regulation and Integration of Multiple Systems pp. 995-1035, Oxford University Press, New York, 1996より引用。

一方、体内にはタンパク質に組み込まれているアミノ酸だけでなく、遊離型のアミノ酸も存在します。遊離アミノ酸をまとめてアミノ酸プールと呼びますが、このアミノ酸プールはかなり安定して存在すると言われていています。体内では体重の約40%を占める骨格筋がタンパク質と遊離アミノ酸の最も大きな貯蔵庫ですが、前者が約20%に対して後者は約0.5%程度しか存在しないため、遊離アミノ酸はかなり少ないと言えます。骨格筋の遊離アミノ酸濃度を表1に示しました。その特徴として、グルタミンとタウリン（タウリンは正確にはアミノ酸類似物です）が圧倒的に多くを占め、体内で合成されない必須アミノ酸（表1の上段）は比較的低濃度で存在します。

体内の遊離アミノ酸の主な供給源は、食事として摂取するタンパク質の消化吸収と体内のタンパク質の分解によって生成されるアミノ酸です。したがって、食事タンパク質の供給が十分量でないと、体タンパク質を分解して遊離アミノ酸を供給するので、筋肉が痩せ細る結果になります。最近では、高齢者の筋肉の減弱（サルコペニア）が大きな問題になっていますが、高齢者こそ良質且つ十分量のタンパク質栄養が必要です。

さらに、筋肉を維持増強するためには、栄養摂取だけでは不十分であり、筋肉に負荷をかけて運動することが必須です。高齢者のサルコペニアの予防改善には、十分量のタンパク質（アミノ酸）栄養と運動（特に筋肉に負荷をかけるレジスタンス運動）が重要です。

分岐鎖アミノ酸の生理機能

分岐鎖アミノ酸 (Branched-Chain Amino Acids: BCAA) は、ロイシン、イソロイシン、バリンの

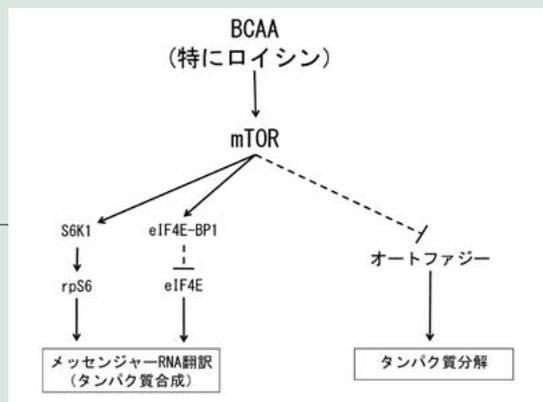


図1 ロイシンによるタンパク質合成促進と分解抑制
mTOR：哺乳動物のラバマイシン標的のタンパク質キナーゼ、S6K1：S6キナーゼ1、rpS6：リボソームタンパク質S6、eIF4E：真核生物の開始因子4E、eIF4E-BP1：eIF4E結合タンパク質1。オートファジー（自食作用）：リソソームの関係したタンパク質分解機構。実線は「促進」、点線は抑制を示す。

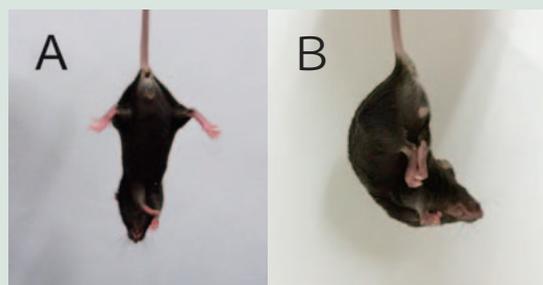


図2 正常マウス(A)と全身性BCAA代謝亢進マウス(B)の尾懸垂テスト
これらのマウスは著者の研究室で作製された。

伝子改変マウスは、尾懸垂により体を抱え込む動作を示しますが(図2)、これは神経的異常によるものとされています。興味深いことに、このマウスにBCAAを投与すると体を抱え込む動作をしなくなります。

以上のように、アミノ酸(特にBCAA)はタンパク質合成の材料であるばかりでなく、かなり多様な生理機能を持つことが明らかにされています。現代の人々の健康の維持増進と疾病治療にアミノ酸が利用される機会が増加すると思われる。

3つのアミノ酸の総称であり、タンパク質を構成するアミノ酸の約20%を占める主要なアミノ酸です。一方、アミノ酸プール(遊離アミノ酸)中にBCAAは1%程度しか存在しないため、かなり少量です(表1)。全身のBCAA量を計算しますと、数グラム程度しか存在しないため、現在ではBCAAサプリメントが市販されていますので、体内の遊離BCAAを効果的に補給することが可能です。

この体内の遊離BCAA濃度を上昇することにより、タンパク質合成を高め、同時に体タンパク質分解を抑制することができます(図1)。すなわち、BCAAは体づくりを促進するアミノ酸と言えるでしょう。上述したサルコペニア予防改善にも有効な食品成分として注目されています。

サルコペニアばかりでなく、血中BCAAとアルブミン濃度が低下する肝硬変患者の治療薬としてもBCAAは使用されています。肝硬変患者にBCAAを継続的に補充しますと、血中アルブミン濃度を上昇する効果が認められています。また、肝硬変患者に頻発する腓返り(筋痙攣)の発生を著しく低下しますが、これもBCAAのタンパク質代謝改善と関係すると考えられます。このように、BCAAはタンパク質代謝を調節する中心的なアミノ酸として認識されるようになりました。

さらに、最近の研究により、先天性にBCAA代謝が亢進して血中BCAA濃度が著しく低いヒトは癲癇発作を伴う自閉症患者であることが明らかにされました。このBCAA代謝亢進による症状は、最初にBCAA代謝系酵素の遺伝子改変により作製されたマウスで発見され、その後同じ遺伝子に異常を持つヒトが見つかりました。この遺

1983年名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了、医学博士。名古屋大学医学部助手、米国インディアナ大学医学部生化学講座のResearch Fellow、筑波大学体育科学系講師、名古屋工業大学助教授・教授を経て、2008年より名古屋大学大学院生命農学研究科教授、専門分野は栄養生化学。やるべきことは速やかに実行することがモットーです。やれる機会は少ないのですがゴルフ等のスポーツによる運動が趣味。

しもむら よしはる



未来材料・システム研究所看板除幕式を挙行

●未来材料・システム研究所

未来材料・システム研究所は、10月22日(木)、共同教育研究施設2号館玄関において、同研究所の看板除幕式を挙行了しました。

同研究所は、学内唯一の理工学系附置研究所であったエコトピア科学研究所を改組し、新たな附置研究所として10月1日付けで設立されたものです。同研究所では、天野 浩同研究所教授をセンター長とする「未来エレクトロニクス集積研究センター」を所内に設置し、窒化ガリウム半導体等に代表される次世代の革新的省エネルギーのためのエレクトロニクス材料デバイスの研究開発による省エネルギーイノベーションの実現を目指します。併せて、これまでの研究所が持つ強い研究資源である計測科学技術を統合した「高度計測技術実践センター」が協力体制となり、さらに、研究部門を「材料創製部門」、「システム創成部門」の2部門に改組し未来材料・システム分野の研究体制を充実させ、エネルギーの創出・変換、蓄積、伝送、消費の高度化・超効率化の全体を視野に入れた革新的省エネルギーのための材料から社会実装に至る幅広い研究を行い、環境調和型持続可能社会の実現に寄与することを目的としています。



あいさつする総長



記念撮影

除幕式は、秋晴れの空の下、松尾総長、松下理事、興戸所長、財満副所長、片山副所長、天野センター長、岩田高度計測技術実践センター長をはじめ、多数の研究所関係者が出席して行われました。

はじめに、興戸所長から、これまで材料とエネルギー、システムの研究を推進する研究所となるべくミッションの再構築を進め、今年4月に世界に誇る電子顕微鏡などを核とした附属高度計測技術実践センターを設置したこと、さらに今回の改組により、同研究所の強みを生かし特色ある共同利用・共同研究拠点となるための体制づくりをしてきたことについて述べられました。

続いて、松尾総長から、本学の「ものづくり研究」の伝統と電子顕微鏡などの高度な計測技術、さらに社会実装を見据えたシステム応用をワンルーフの下に取り入れた研究所は他に類を見ない新たな試みであり、画期的な成果がうまれることを期待している、と同研究所への思いが述べられました。

その後、関係者による看板除幕式が行われ、同研究所の今後の発展を祈念しました。

宇宙地球環境研究所設立記念行事を挙

●宇宙地球環境研究所



公開講演会

宇宙地球環境研究所は、11月3日(火・祝)から11月5日(木)までの3日間、10月1日付けで太陽地球環境研究所、地球水循環研究センター及び年代測定総合研究センターの3つの学内の研究組織が統合され、新しい附置研究所として設立されたことを記念して、設立記念行事を開催しました。

初日の3日(火・祝)には、IB電子情報館大講義室において「私たちのくらしと宇宙地球環境」をテーマに設立記念公開講演会を開催しました。藤井良一同研究所教授による「オーロラを通して診る宇宙地球環境」、中塚武共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授による「過去2千年間の気候変動の歴史から学べること」、江守正多国立研究開発法人国立環境研究所地球環境研究センター室長による「気候変動リスクと人類の選択」と題した講演及び専門的な分野に及ぶ質疑応答が行われ、来場した約250名の一般市民は熱心に耳を傾けていました。

4日(水)には、野依記念学术交流館において設立記念式典及び記念祝賀会を開催しました。記念式典では、町田同研究所長及び松下理事からあいさつがあり、続いて、来賓



国際シンポジウム



設立記念

の牛尾則文文部科学省研究振興局学術機関課長、西田篤弘国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所名誉教授、安成哲三大学総合地球環境学研究所長から祝辞があり、新研究所への期待とともに、ミッションの実現を祈念する言葉が述べられました。その後、来賓の山脇実愛知県豊川市長及び野尻秀隆北海道足寄郡陸別町長の紹介、国内外の関連機関等からの祝電の紹介が行われ、閉会となりました。

引き続き行われた記念祝賀会では、國枝理事のあいさつの後、元太陽地球環境研究所長である上出洋介名誉教授からの乾杯の発声により会が和やかに始まり、記念式典出席者、同研究所教職員、学生との懇談にも花が咲き、交流が深められました。最後に、長友恒人奈良教育大学名誉教授・前学長及び新野宏東京大学大気海洋研究所教授から祝辞が、藤井良一同研究所教授から、研究所統合への経緯、今後の期待などが述べられ、祝賀会は盛会のうちに終了しました。

また、4日(水)から5日(木)にかけて、野依記念学术交流館で開催した国際シンポジウム「宇宙・太陽・地球環境の結びつきと過去・現在・未来」では、国内外から177名の研究者の参加の下、10件の国内外の研究者による招待講演及び82件のポスターセッションが行われ、白熱した議論が展開されました。

「中国人作家・郁達夫八高入学100周年」記念行事を開催

●大学院文学研究科、大学院国際言語文化研究科

大学院文学研究科、大学院国際言語文化研究科は、9月26日(土)から10月9日(金)の間、中央図書館ビブリオサロンにおいて、「中国人作家・郁達夫八高入学100周年」記念展示会を開催しました。これは、大正初期の名古屋を舞台にした小説「沈淪」で有名な中国人作家郁達夫の本学の前身である旧制第八高等学校(八高)入学100周年を記念し



展示の様子

たもので、高文軍桜花学園大学教授の協力のもと開催されました。

展示では、郁達夫の写真、八高卒業証書、早期文学略年表、著書、八高関連図書、日本の研究資料など約130点を展示しました。新しい試みとして小説「沈淪」の文章に合わせた当時の名古屋の写真資料の展示、八高時代に郁達夫が新聞に投稿し掲載された漢詩に合わせて撮られた写真を展示し、一般の人にも親しみやすいものとなりました。日本の文人である服部担風との交流史実の紹介などもあり、日本の自然に親しみ、日本文化を愛した若き留学生の八高在学中4年間の文学活動を紹介しました。展示会の様子は、新聞でも紹介され、期間中には延べ492名の来館者がありました。

また、記念展示終了後の10月25日(日)には、記念講演会を文系総合館7Fカンファレンスホールにおいて開催しました。高文軍教授より記念展示会の資料を中心に詳しい説明を加えた講演が行われ、会場は満席の盛況で質疑応答も活発に行われました。

第29回国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウムを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科は、10月29日(木)、野依記念学術交流館において第29回国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウムならびに本学、ジェトロ・アジア経済研究所共催の国際シンポジウム「中国・日本と激変するアジア経済」を開催しました。今回のシンポジウムは、国際的な学術交流と社会連携による研究成果の公開を目的とし



出席者による記念撮影

たものです。開会にあたり、松尾総長、赤星 康日本貿易振興機構副理事長、鈴木 武一般社団法人キタン会会長からあいさつがあり、本会議の意義及び産学官連携の重要性が強調されました。

今回のシンポジウムは、日本学術振興会科学研究費補助金の支援を受けて、5年間取り組んできた国際共同研究の最終的な成果をベースに、アジア地域における中国経済の台頭と日本の対応を主たるテーマとしました。日中の経済関係だけでなく労働移動と所得格差、環境保全、気候変動、エネルギーなどの幅広い課題について、大西康雄アジア経済研究所上席主任調査研究員、胡鞍鋼清華大学教授、深尾京司一橋大学教授、シャオファ・チェン世界銀行開発経済研究グループ主席統計官、クラウス・フバーチェックメリーランド大学教授、李実 北京師範大学教授ら各分野で活躍する専門家から研究報告がありました。また、午後のパネル討論では、中国の労働賃金上昇、中国企業の海外進出及びアジア地域の産業構造転換について、活発な議論が展開されました。シンポジウムには中国をはじめとして、各国から約30名の外国人研究者を含む計185名が出席し、盛会のうちに終了しました。

第2回フライブルク大学・アデレード大学・名古屋大学(FAN)大学間国際共同シンポジウムを開催

●大学院医学系研究科

アデレード大学、フライブルク大学、本学は10月15日(木)から17日(土)まで、鶴舞キャンパス鶴友会館等において第2回国際共同シンポジウム及び国際合同学術協力会議を開催しました。同シンポジウム及び学術協力会議は各大学持ち回りで開催されており、本学では昨年3月に続いて2回目の開催となりました。医学分野における3大学間の



シンポジウム開会のあいさつの様子

共同教育プログラム、共同研究のさらなる発展を目的として、各大学から多くの参加がありました。

シンポジウムでは、まず高橋医学系研究科長のあいさつの後、3大学から合計13名が、神経科学、老年科学、腫瘍・サイコオンコロジー科学の3分野で研究発表を行いました。発表後は大学の枠を超えて活発な議論が行われ、今後の共同研究の可能性を探る上でも素晴らしい情報交換の場となりました。16日(金)には3大学関係者による学術協力会議も開催され、今後の学術交流における方向性や課題について議論が行われました。

また、今年には新たなプログラムとして、アデレード大学と本学の学生による発表も加わりました。これは今年10月より開始されたアデレード大学とのジョイントディグリープログラムとも関連し、学生同士の情報交換のために行われたものです。その後アデレード大学の学生は、関連の研究室に2週間滞在し本学での研究活動を体験しました。

このような体験を通して、教員はもちろん、学生レベルにおいても深い関係が築かれ、今後の3大学間における研究交流の更なる発展が期待されます。

モンゴル科学技術大学外国語学部一行が訪問

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、10月22日(木)、モンゴル科学技術大学外国語学部一行計25名の訪問を受けました。

モンゴル科学技術大学は、首都ウランバートル市にあるモンゴル国内最大規模の大学です。その名称のとおり理工系中心の大学であり、外国語学部は、数少ない文系学生が学ぶ場です。本学とは2009年に大学間学術交流協定を結ん



記念撮影

でいます。

モンゴル科学技術大学外国語学部からは、訪問にあたり、将来的に同研究科と覚書を結ぶことを視野に意見交換をしたいこと、英語教育の実践について学びたいこと等の具体的な要望が示されていました。

当日は、福田同研究科長から同研究科の現状と課題について説明があった後、古泉 隆教養教育院助教がアカデミックイングリッシュの趣旨と教務内容について説明を行いました。

さらに、トゥデヴ・バトバヤルモンゴル科学技術大学外国語学部長及び福田研究科長が、両部局の教員交流に関して意見交換を行った後、伊東章子国際教育交流本部特任講師から、本学及び同研究科の留学生及び研究生の受け入れ体制について説明が行われました。

その後、一行は、博物館を見学し、ノーベル賞展示の説明に傾聴していました。

今回の本研究科訪問は、今後の両機関の教育・研究の交流への足がかりとなりました。

第37回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



講演する溝口教授

附属図書館は、10月20日(火)、中央図書館2階ディスカバリスクエアにおいて、第37回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。

今回は、溝口正人名古屋市立大学芸術工学研究科教授による「モノのふみをよむ - 絵図と遺構で読む高木家陣屋 -」と題した講演が行われ、学内外から36名の参加がありました。

講演では、まず、大垣市上石津地区にある国史跡旗本西高木家陣屋跡について、同図書館で所蔵している高木家文書の伝来により、近世における旗本領主の実態を明らかにすることが可能な遺跡であることが説明されました。そして、屋敷図や古写真、遺構の調査結果などを使いながら、陣屋の構造と歴史の変遷が解説されました。

参加者からは、「当時の屋敷図や建築から文化を知ることができた」、「建物と文書とあわせて説明があり、江戸時代をイメージしやすかった」などの感想が寄せられました。

第114回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する堀教授

減災連携研究センターでは10月22日(木)、減災館において、第114回防災アカデミーを開催しました。今回は、堀宗朗東京大学地震研究所教授が「スーパーコンピューターの地震防災・減災への利用」と題して講演を行い、66名の参加がありました。講演は地震工学という学問分野の紹介から始まり、建物や構造物を設計する際に行われる地震応答解析の重要性が示された上で、日本最速のスーパーコンピュータである「京」を用いて行われた、地震防災に関連するシミュレーションの様々な実例が紹介されました。高層ビルなどの建築物の詳細な構造まで含めて計算機中のモデルとして用意され、大地震時の振る舞いが正確に予測でき、さらには都市全体の挙動や津波来襲時の避難など、構造物の応答だけでなく、防災に関連する幅広い分野で活用されていることが分かりました。シミュレーション技術は、災害の経済活動への影響など、さらに幅広い分野へと拡張されており、今後の展開が期待されます。

第47回地球教室を開催

●博物館



南知多の海岸付近で化石採集を行う参加者の様子

博物館では、10月24日(土)、25日(日)の2日間、第47回となるフィールドセミナー地球教室「博物館の収蔵庫と野外で深海の地層と化石を調べよう！」を開催しました。今回は抽選で選ばれた28名(小学3年から高校2年生と一般)が参加しました。

1日目は同館において、日本や世界のさまざまな地層について紹介した後、地層を作る実験をしました。また、同館の収蔵庫において、同館所蔵の化石などを観察しながら、化石が地層の中に残されるプロセスについて考えました。2日目は南知多町の礫ヶ浦と片名を訪問し、砂岩と泥岩の地層を観察した後、化石の採集を行いました。参加者は、二枚貝やヒトデ、ウニ、魚の鱗などの化石を自分で見つける興奮を味わい、古代の生物が地層に残された過程を考えることによって自然を身近に感じ、理解を深めていました。この事業は同館と名古屋市科学館との連携事業の一環で、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けています。

全学構成員対象FD・SD「障害者差別解消法と合理的配慮」を開催

●学生相談総合センター

学生相談総合センター障害学生支援室は、10月29日(木)、ES総合館において全学構成員対象FD・SD第1弾「障害者差別解消法と合理的配慮」を開催しました。これは来年4月に「障害者差別解消法」が施行され、国立大学法人においても障害者に対する不当な差別的取扱いが禁止されるとともに、障害者に対する合理的配慮の提供が義務



合理的配慮について説明をする東教授

となることを受けて開催したもので、講師に弁護士である東俊裕熊本学園大学教授を招きました。

講演の中では合理的配慮について、視覚障害者の方を例に挙げ、色が判別できない信号機を渡る場合に周りが声をかけるだけでは不十分であり、視覚障害者が利用できない信号機を設置していることが問題であることが指摘されました。また、東教授は、多くの人は障害者が困っているのは、信号機が万人に使えないからではなく、障害があるからだと考えますが、障害者の困難は、本人の障害特性だけではなく、社会のあり方からも生じていると指摘しました。

音響装置付ではない信号が無数にあるように、私たちの社会には、障害者が相対する社会的障壁が無数に存在します。また、社会的障壁上の例にあるように、物理的障壁のみではなく、私たちの考え方の中にもあります。合理的配慮とはその障壁を除去する取り組みです。来年1月7日(木)には全学FD・SD第2弾を開催します。合理的配慮を誰にどのように提供するのかを、東京大学バリアフリー支援室の教員2名から学ぶ実践編となります。そちらもぜひご参加ください。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 リニア認可1年①:「迷駅」改造 見えぬ絵 森川高行未来社会創造機構教授は「この地域でリニアの効果を広げるには車の接続のよさも必要」と語る	10.16 (金)	朝日 (朝刊)
2 名古屋市科学館/科学創作コンクール/益川敏英本学特別教授の審査による益川名誉館長特別賞発表: 神の倉中学校2年生の作品など5点が選ばれた	10.16 (金)	中日 (朝刊)
3 月刊安心新聞: ノーベル賞ラッシュ「ぬるま湯」時代の成果 益川敏英本学特別教授と、小林 誠同特別教授の「小林・益川理論」は発表から30数年の時を経ての快挙だったことが取り上げられる	10.16 (金)	朝日 (朝刊)
4 田村哲樹法学研究科教授は愛知県の低い男性の育休取得率について「性別分業意識が比較的強い」ことを挙げ「男性の所得が高いと、男性の育児参加を妨げる」と分析	10.16 (金)	朝日 (夕刊)
5 名古屋大学鶴舞公開講座「家族のきずなで健やかに生きる～子・親・祖父母で考える家庭内の医療～」開催: 11月14日 前川厚子医学系研究科教授が講演	10.16 (金) 10.21 (水)	読売 中日 (朝刊)
6 法学研究科との相互協力の一環で十六銀行がアジアからの留学生3人に奨学金を授与	10.17 (土)	日経 (朝刊)
7 本学と名古屋市内にある日本政策金融公庫の3支店は産学連携を推進する覚書を締結	10.17 (土) 10.21 (水) 10.23 (金)	中日 (朝刊) 日刊工業 ニッキン
8 日中大学生討論会開催: 17日 石和宗右さん本学学生は「先人が築き上げた日中友好を確たるものにしていきたい」と語る	10.17 (土)	中日 (朝刊)
9 日本人の自然科学系ノーベル賞受賞者と業績で野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授のノーベル賞受賞者が取り上げられる	10.18 (日)	日経 (朝刊)
10 新城通信: 約5年前より古民家再生プロジェクトで本学学生らが改修に乗り出し、久米貴士さん本学学生は「ここで初めて材料の調達や釘打ちの仕方を学びました。すごく勉強になっています」と語る	10.18 (日)	朝日 (朝刊)
11 国立大学 教育・文系学部の改革 中部地方の主な国立大学の教育・文系学部の改革で本学は改革を検討中と取り上げられ、「いま、大学で何が起きているのか」の著者日比嘉高文学研究科准教授は「地方のゼロ免課程は文学部や経済学部がない大学で、人文社会系の役割を果たしていることもある」と語る	10.19 (月)	中日 (朝刊)
12 堀場雅夫賞 表彰式: 湯川 博先端ナノバイオデバイス研究センター特任講師	10.20 (火)	日刊工業
13 ただ今就活中: 体験者が「就活・キャリアサポーター」多忙な理系の相談役 本学に文系理系の学生を問わずに活動する同様のサポーター制度がある	10.20 (火)	中日 (朝刊)
14 藤井聡太さん教育学部附属中学1年生が将棋のプロ養成機関「奨励会」で史上最年少の13歳2か月での三段昇段を18日に決定	10.20 (火)	中日 (夕刊)
15 全国の国立大学86校が6月末に文部科学省に提出した来年度から6年間の中期目標・計画の素案が示され、特色ある取り組みとして本学のアジアサテライトキャンパスの展開が取り上げられる	10.21 (水)	読売
16 数理ウェーブ開催: 24日 伊師英之多元数理科学研究科准教授が「あなたが三角関数を学ぶ意味」をテーマに講演	10.21 (水)	中日 (朝刊)
17 久本直毅理学研究科准教授は神経軸索再生因子を受け取るための仕組みを解明	10.21 (水) 10.29 (木)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
18 天野 浩未来材料・システム研究所教授の研究室と共同開発した半導体を使い、名古屋大学発ベンチャー「フォト・エレクトロン・ソウル」が電子顕微鏡や3Dプリンターのの中核部品に使う次世代型の電子ビーム発生装置の実用化に乗り出した	10.22 (木)	中日 (朝刊)
19 内田 良教育発達科学研究科准教授は、日本救急医学会総会・学術集会が組み体操の「タワー」と呼ばれる技は、落下による頭部外傷の危険性が高いとの調査結果を発表したことについて「タワーは段数が低くても危険だ」と語る	10.22 (木)	中日 (朝刊)
20 「第68回新聞週間記念の集い」開催: 21日 丹羽宇一郎本学名誉博士が「わが故郷名古屋の「明日、を想う」をテーマに講演し「世界の一流のエリートと競争しなくては行けない。積極的に海外に出て行くべきだ」と語る	10.22 (木)	読売 中日 (朝刊)
21 読売新聞講座「日はまた昇るか? 日本経済再生のカギを握る先進技術」開催: 21日 読売新聞中部支社編集センター記者岡崎 哲氏が留学生約30人に英語で講義	10.22 (木)	読売
22 ニュースな科学: 日本のノーベル賞続いか ノーベル賞 (自然科学分野) が期待される日本人候補者で竹市雅俊本学特別教授が取り上げられる	10.23 (金)	日経 (朝刊)
23 10月23日は化学の日 日本化学会会長榊原定征氏本学卒業生 課題解決へのキー技術 本学で化学グランプリ2015二次選考が行われた	10.23 (金)	日経 (朝刊) 日刊工業
24 名古屋大学 3Dプリンターで患者の内臓模型 難手術「手応え」十分 森 健策情報戦略室教授は「臓器を手で触ったときの変形まで再現できるようになれば」と語り、伊神 剛医学部附属病院病院講師は「医師たちが手術のイメージを共有できる。画像だけでは難しかった」と語る	10.23 (金)	中日 (夕刊)
25 朝日カルチャーセンター: 「暗黒の宇宙を探る」杉山 直理学研究科教授、『西洋文化』との遭遇 前野みち子本学名誉教授	10.23 (金)	朝日 (夕刊)
26 PhD プロフェッショナル登龍門第1回グローバルビジネス講座「グローバル人材 海外で働くということー20年余にわたる海外勤務で得た成功と教訓を踏まえてー」開催: 11月5日 東海東京フィナンシャル・ホールディングス代表取締役社長石田建昭氏が講演	10.24 (土)	岐阜新聞

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
27 角谷快彦 PhD 登龍門推進室特任准教授は日本、米国、中国、インドの4カ国で行われた意識調査から日本人は家族や持ち金よりも、金融資産や年金を重視する傾向があるとの分析結果を発表した	10.25 (日)	毎日 (朝刊)
28 紙飛行機飛び出せ成層圏へ 本学のサークルNAFTが大型風船「スペースバルーン」で小学生がメッセージを書いた紙飛行機を上空30キロから飛ばすプロジェクトに取り組み、NAFTメンバーの岩倉亮介さん工学部3年生は「本番までに改善し、成功させて子どもたちの思い出に残すプロジェクトにしたい」と語る	10.25 (日)	中日 (朝刊)
29 天野 浩未来材料・システム研究所教授は諏訪清陵高校で講演し「今やるべきことに夢中になって取り組んでほしい。」と語る	10.25 (日)	信濃毎日
30 野依良治本学特別教授は「基礎研究は研究者の自由な発想が何より重要だ。資金を出す政府や企業は短期間で評価したがるが、もう少し寛容にみてほしい」と語る	10.26 (月)	日経 (朝刊)
31 森島邦博未来材料・システム研究所特任助教らが協力し「ミュール粒子」を利用し、エジプトのピラミッドの内部構造を解明する調査を開始するとエジプト考古省が発表	10.26 (月)	日経 (夕刊)
	10.27 (火)	朝日 (夕刊)
		毎日 (朝刊)
32 博物館スポット展名大に花祭が来た！ー花祭アーカイブスの構築に向けてー開催：13日～11月14日まで	10.26 (月)	日経 (夕刊)
	10.30 (金)	読売
33 記者の目：医療事故調査制度 遺族に説明を尽くす姿勢を貫く医療機関として医学部附属病院が取り上げられ長尾能雅医学部附属病院教授は「調査では事実経緯を明らかにすることが何より大切。そのためには、患者のそばにいた家族に話を聞くことが必要だ」と語る	10.27 (火)	毎日 (朝刊)
34 3.11後のサイエンス：素粒子で原子炉を透視する 中村光廣未来材料・システム研究所教授らのグループは株式会社東芝と共同で2号機の原子炉内部をミュール粒子で透視	10.29 (木)	毎日 (朝刊)
35 減災館第11回特別企画展「濃尾地震と建築被害」開催：28日～11月21日 西澤泰彦環境学研究所教授は「これからの災害に備えるため、学ぶことがたくさんある」と語る	10.29 (木)	中日 (朝刊)
36 大機小機：世界大学ランキングの怪 ノーベル賞で湧いた本学も301～350位の間 英語論文の数や海外での論文引用回数など日本にとって不利にできている	10.29 (木)	日経 (朝刊)
37 ニュースQ3：瀬戸の中1 最年少プロヘー直線 藤井聡太さん教育学部附属中学1年生が将棋のプロ養成機関「奨励会」で史上最年少の13歳2か月で三段になった	10.29 (木)	朝日 (朝刊)
38 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授と栗原大輔理学研究科特任助教らのグループは植物を丸ごと透明化し、中まで観察する新技術を開発	10.29 (木)	読売
	10.30 (金)	中日 (朝刊)
	11. 6 (金)	日経産業
39 第47回全日本大学駅伝開催：11月1日 東海学連選抜 芦崎陽介さん本学大学院生、矢野祥一さん同大学院生、国司寛人さん同4年生	10.30 (金)	朝日 (朝刊)
40 複合技術創出 科学技術振興機構理事長濱口道成元総長は、「人材の多様性では女性の活躍に注目している。科学技術で生かせるように、少数派の見方ならではの良さを引き出したい」と語る	10.30 (金)	日刊工業
41 私の履歴書29 東海旅客鉄道代表取締役名誉会長葛西敏之氏 豊田章一郎全学同窓会会長と共に理想の学校、設立に尽力 参画90社 全寮制で人間力育む 海陽学園・海陽中等教育学校開校	10.30 (金)	日経 (朝刊)
42 第47回中日教育賞贈呈式：氏家達夫教育発達科学研究科教授が祝辞を述べた	10.30 (金)	中日 (夕刊)
43 2015年度文化功労者：岡崎恒子本学名誉教授	10.30 (金)	毎日 (夕刊)
		他2社
	10.31 (土)	読売
		他3社
	11. 1 (日)	朝日 (朝刊)
	11. 2 (月)	日刊工業
44 中日新聞「リンクト」：HUMAN'S EYE 柔軟な発想とリーダーシップが、各論のサイクルを回す。松尾総長	10.31 (土)	中日 (朝刊)
45 豊田佐吉氏の命日に当たる10月30日に顕彰祭が開かれ、豊田章一郎全学同窓会会長は「自分で考えて作ってみる精神が重要だ」と語る	10.31 (土)	日経 (朝刊)
	11. 2 (月)	日刊工業
46 チンパンジーと博士の知の探検24：ブータンが目指したこと 京都大学霊長類研究所教授松沢哲郎氏 松尾総長と京都大学教授桑原武夫氏の学術調査隊がブータンに赴き調査したことが取り上げられる	11. 1 (日)	日経 (朝刊)
47 地域医療を担うドクター紹介…葛谷雅文医学系研究科教授	11. 1 (日)	朝日 (朝刊)
48 病院の実力：膵臓がん 藤井 努医学系研究科准教授 各部署連携 高い実績	11. 1 (日)	読売
49 映される街 減る死角：附属中央図書館がカメラの有効性を生かしつつ、利用者の自由な行動に配慮した監視カメラの設置方法を模索したことが取り上げられる	11. 1 (日)	朝日 (朝刊)
50 2015年紫綬褒章：小澤正直情報科学研究科教授、福田敏男本学名誉教授	11. 2 (月)	中日 (朝刊)
		他4社
51 産業化の出発地点 飯島澄男本学特別招へい教授は「研究も開発も、するのは人間だ。優秀な人材が集まり、良いアイデアが出た。これから本格的な製品応用が始まる。幅広い産業分野で知恵を貸してほしい」と語る	11. 2 (月)	日刊工業
52 名大×天野研究室 夢の顕微鏡へ一歩 西谷智博シンクロトン光研究センター特任講師は天野 浩未来材料・システム研究所教授の研究室と共同で強力な出力の電子線発生装置を開発	11. 2 (月)	朝日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
53 国際シンポジウム「文化遺産としての朝鮮通信使」開催：10月31日 本学で開催された	11. 2 (月)	読売
54 下村 脩本学特別教授がパグウォッシュ会議の世界大会で講演し、原爆体験について語り「戦争と核兵器のない世界を望む」と話す	11. 3 (火)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
55 2015年秋の叙勲：瑞宝中綬章 小池啓三郎元事務局長、小嶋秀夫本学名誉教授、近藤一義本学名誉教授、四方義啓本学名誉教授、辻 敬一郎本学名誉教授、野村浩康本学名誉教授	11. 3 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
56 いまドキッ！大学生：アナウンサーへ道 小川明子国際言語文化研究科准教授がCBCのアナウンサー時代の経験を語る	11. 4 (水)	中日 (朝刊)
57 この人：原子核物理の研究で国際賞を受賞した佐々木千尋氏本学卒業生	11. 4 (水)	中日 (朝刊)
58 ノーベル賞緊急講演会「素粒子と宇宙の謎を解くカギ～ニュートリノ振動とは何か？」開催：7日 伊藤好孝宇宙地球環境研究所教授、棚橋誠治理学研究科教授、中村光廣未来材料・システム研究所教授が講演	11. 5 (木) 11.10 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
59 読売新聞講座「ニュースメディアとデジタル技術」開催：4日 読売新聞東京本社メディア局専門委員松井 正氏が講義	11. 5 (木)	読売
60 生きものたちの時間 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授⑧：夜を告げるホルモン 哺乳類の繁殖期左右	11. 6 (金)	中日 (朝刊)
61 東海経済シンポジウム開催：11月5日 森川高行未来社会創造機構教授がパネルディスカッションに参加し、丹羽宇一郎本学名誉博士が講演	11. 6 (金)	朝日 (朝刊)
62 長崎・パグウォッシュ会議閉幕：創設当時は参加者の大半は物理学者で政治から一線を画し、益川敏英本学特別教授が「問題を客観的にとらえる」と言うように冷戦終結などにつながる活動を展開できたとされているが、最近では自然科学者の参加割合が減っている	11. 6 (金)	中日 (朝刊)
63 発信箱：科学者と戦争 パグウォッシュ会議世界大会に出席した益川敏英本学特別教授と下村 脩同特別教授の話	11. 6 (金)	毎日 (朝刊)
64 朝日カルチャーセンター：「暗黒の宇宙を探る」杉山 直理学研究科教授、「シャルトル大聖堂の聖遺物とステンドグラス」木俣元一文学研究科教授	11. 6 (金)	朝日 (朝刊)
65 第10回暮らし方交流会開催：15日 高野雅夫環境学研究科教授が講演	11. 7 (土)	朝日 (朝刊)
66 本学と名古屋交通局が連携し、本学の学生の発想や知識を活用した市営地下鉄、市営バスの魅力向上のためのプロジェクトが始まる	11. 8 (日) 11.11 (水)	読売 中日 (朝刊)
67 医学部附属病院はセントラルクリニックグループの医療法人松伯会との予防医療・健康増進に係る共同研究を開始すると発表	11.10 (火)	朝日 (朝刊) 日経 (朝刊)
68 いじめに悩む君へ：宮本延春氏本学卒業生が「はじめに生きていけば、大事に思ってくれる人が絶対にいる。勉強だってやり直すことができるんです」と語る	11.10 (火)	中日 (夕刊)
69 Culture：目指せ「最年少プロ棋士」「棋界 担える」師も太鼓判 藤井聡太さん教育学部附属中学1年生	11.11 (水)	中日 (朝刊)
70 レーザー：新視点のヒント 濱口道成元総長は「女性研究者が職場でどんな思いを抱いているか。男性も少数派の職場を体験すればよく分かるそうだ」と語る	11.11 (水)	日刊工業
71 第31回博物館企画展北の縄文人ー豊かな海と山にかこまれてー開催：11月10日～2016年1月23日	11.11 (水)	朝日 (夕刊)
72 MRJ 初飛行の舞台となった県営名古屋空港に多くの人が足を運び、本学で宇宙工学を学ぶ学生は「僕もいつか、こんな仕事に携わりたい」と語る	11.12 (木)	朝日 (朝刊)
73 加藤真平情報科学研究科准教授ら自動運転システムの研究を進めている本学教員が、12月に新会社「ティアフォー」を設立する	11.13 (金)	日経 (朝刊)
74 野依フォーラム発足15年記念例会開催：13日 野依良治本学特別教授が「科学技術はどこへ行くのか」をテーマに講演	11.14 (土)	中日 (朝刊)
75 長尾能雅医学部附属病院教授は、10月から始まった医療事故調査制度について「医療機関と遺族の見解が分かれるケースの情報を集めて分析し、調査対象の条件をより具体化していくことが必要」と語る	11.14 (土)	朝日 (朝刊)
76 竹岡敬和工学研究科准教授らの研究チームは、昆虫の鮮やか青色など従来の色素と根本的に異なる発色方法を活用し、色あせしないポスターなどを実現する新しい色材料の開発に成功	11.15 (日)	朝日 (朝刊)
77 医療カイゼン 企業に学ぶ 名大病院講座 トヨタが指南 10月に開始した医学部附属病院の講座「ASUISHI」でトヨタグループの社員やOBを招き、6ヶ月かけて生産現場で培われた品質管理手法を医師が学びながら、医療現場で「カイゼン」に取り組む	11.15 (日)	日経 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月21日(水)～1月30日(土)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日、
1月5日～7日は17:00まで)、
13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日、12月27日～1月4日

入 場 料：無料

附属図書館医学部分館ミニ展示会

「名古屋のセンパイ！ 明治編 —名古屋大学全学同窓会大学支援事業①—」

内 容：明治4年(1871年)の名古屋大学創基から昭和22年(1947年)の名古屋帝国大学が名古屋大学へと改称されるまでの、本学の前身校に在学、在職した著名人に関連する、入手が困難になりつつある古書も含めた図書、文書、写真、絵葉書等によるコレクションを展示公開する

[関連特別講演会]

1月27日(水)

場 所：医学部基礎研究棟 1階会議室2

時 間：10:00～11:30

講演題目：「尾張医学の大先輩 伊藤圭介—その医学と本草学」

講 演 者：山内一信(本学名誉教授)

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505



11月7日(土)～3月12日(土)

(期間中の土曜日 全8回)

場 所：経済学部2階
カンファレンスホール

時 間：10:00～12:00

対 象：中学生以上、一般

参 加 費：無料

名古屋大学オープンカレッジ

「自由奔放！サイエンス—知識・博学への挑戦」

内 容：大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意をできるだけわかりやすく伝える

[問い合わせ先]

経済学研究科

エクステンション・サービス

ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

11月10日(火)～1月23日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日、

12月27日～1月4日

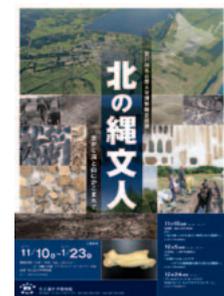
入 場 料：無料

第31回博物館企画展

「北の縄文人—豊かな海と山にかこまれて—」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



11月24日(火)～2月19日(金)

場 所：博物館野外観察園
セミナーハウス2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日、

12月29日～1月3日

入 場 料：無料

博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示

「名大の蛾 I. 秋～冬の蛾」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月19日(土)、20日(日)

場 所：理学部 C 館 2 階物理会議室
(C207号室)
時 間：10:00~16:00
定 員：各20名
対 象：中学生以上、一般 (12/19)、
高校生以上、一般 (12/20)
参 加 費：500円 (実験教材費)

第12回先進科学塾@名大

テ ー マ：「最初の大統一理論：電磁気学を楽しむ！」
講 師：林 熙崇 (理学研究科客員研究員)
内 容：ファラデーが見た電気力線や磁力線の世界を実験・体感して、
何の関係もないと思われていた電気と磁気を統一した最初の大統一理論：電磁気学の世界を楽しむ



[問い合わせ先]

未来材料・システム研究所
教授 中村光廣 052-789-3532

12月19日(土)

場 所：博物館 2 階実験室
時 間：13:00~16:00
定 員：22名
対 象：小学 5 年生以上、一般
参 加 費：500円 (保険料)

ミクロの探検隊®

「ミクロの世界をのぞいて放散虫の進化に触れよう！」
－ 電子顕微鏡のふしぎ－



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月19日(土)

場 所：豊田講堂、他
時 間：13:30~16:30
定 員：300名
対 象：あいち防災リーダー、愛知県防災ボランティアコーディネーター、名古屋市災害ボランティアコーディネーター、耐震化アドバイザー、愛知県防災まちづくりアドバイザー、防災・減災カレッジおよび市町村などで防災に関する講座等を受講された方、行政・企業・学校・地域等で防災に取り組まれている方
参 加 費：500円 (資料代)

第 5 回防災人材交流セミナー

講演題目：「死者ゼロの地域力ー長野県神城断層地震の現場から」
講演者：津滝俊幸氏 (長野県白馬村堀之内地区惣代)
内 容：講演、分科会



[問い合わせ先]

認定特定非営利活動法人
レスキューストックヤード (RSY)
052-253-7550

12月22日(火)

場 所：情報基盤センター 4 階演習室
時 間：13:00~14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成27年度第 9 回

情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「e-ポートフォリオの導入と学習を中心とした効果的なワークフロー」
講演者：宮崎 誠氏 (畿央大学助教)

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月24日(木)、2月27日(土)、3月5日(土)

場 所：博物館 2階展示室
定 員：200名 (立ち見あり)
参 加 費：無料

博物館コンサート NUMCo

「ジャズオーケストラによるクリスマスコンサート」(12/24)
時 間：13:00~14:00
演奏曲目：「サンタが街にやってくる」、「雪だるまつくろう」、他
出 演：フリーヒルズジャズオーケストラ

「ウクレレデュオ」(2/27)
時 間：14:00~15:00
演奏曲目：「ナブアモハラ (花は咲く)」、
「メドレー (ふるさと、浜辺の歌等)」、他
出 演：Yeh☆ie (イエーイエ)、千田初子氏 (フラ)

「博物館が JAZZY になる」(3/5)
時 間：14:00~15:00
出 演：長谷川智則氏、他

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767



1月10日(日)

場 所：医学部附属病院中央診療棟
3階講堂
時 間：14:00~17:00
対 象：一般
参 加 費：無料

平成27年度精神科医療普及目的の市民公開講座

「脳とこころの健康のために ーメンタルヘルスを日常生活に生かすー」

講演題目：「眠れない人のために」
講 演 者：藤城弘樹 (医学系研究科寄附講座講師)
講演題目：「アルコールとメンタルヘルスの深い関係」
講 演 者：入谷修司 (同寄附講座教授)
講演題目：「認知症のあれこれ」
講 演 者：鳥居洋太 (医学部附属病院病院助教)
内 容：講演、映画上映

[問い合わせ先]
医学部附属病院精神科医局 052-744-2282



1月14日(木)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：13:00~18:00
対 象：学生、一般
参 加 費：無料

第5回シンクロトロン光研究センターシンポジウム

内 容：シンクロトロン光を利用した研究成果発表、放射光利用者懇談会総会

[問い合わせ先]
シンクロトロン光研究センター
052-747-6562

1月23日(土)、2月6日(土)

場 所：ナショナルイノベーションコンプレックス 2階小会議室
時 間：10:00~15:00、
10:00~16:00 (2/6)
対 象：博士課程学生、ポスドク

ビジネス人材育成センター 平成27年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「アイデアの出口戦略」、
「若手起業家の経験談を聞く！必要なマインド、能力を探る！」(1/23)
「ユーザーの求めるサービスや製品化への道ースタンフォード大学版の顧客開発・仮説検証モデルの考え方を学ぶー」(2/6)

[問い合わせ先]
社会貢献人材育成本部
ビジネス人材育成センター 052-747-6490

名大トピックス No.271 平成27年12月15日発行
編集・発行／名古屋大学総務部広報渉外課
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。
名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

表紙
第11回ホームカミングデー
でのミニコンサート
(アカペラサークル JP-act)
(平成27年10月17日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

164 八高・旧教養部の面影を名市大にたずねて

名古屋市立大学の滝子（山の畑）キャンパスは、かつての旧制第八高等学校（1908～50年）の校地であるとともに、1964（昭和39）年まで名大旧教養部があった所です。犬山市の博物館明治村に移築された正門を除けば、すでに往時の建設物は残っていませんが、同キャンパスをつぶさに歩けば、その面影をたずねることができます。

地下鉄桜山駅から西へ10分ほど歩くと滝子キャンパスです。北側の滝子商店街付近には、八高正門の門柱をモデルにした街灯がありましたが、老朽化による傷みが激しく、残念ながら1年ほど前に撤去されました。

キャンパスに北門から入ると、太いものは直径約1.5mもある巨木が目につきます。八高時代からここにあり、樹齢100年前後とも言われるクスノキです。

その東側に、樹木に覆われた、少し盛り上がった円形の小山があります。この森（林?）が、当時から八高生にその名で親しまれた「剣ヶ森」です。この森に入っすぐの

所に、学帽に詰襟服、マントに高下駄という、バンカラな八高生をイメージしたブロンズ立像、「八高青春像」があります。奥へ行くと森の頂上部に、八高正門の門柱をかたどり、「第八高等学校所在地」と刻まれた石塔を見ることができます。いずれも、八高同窓会である八高会が戦後に建てたものです。

剣ヶ森から南へ行くと、学生会館の前の低い石垣がめぐらされた一角に、一群のソテツが植えてあります。これは八高のシンボルともなっていたもので、当時は正門に入っすぐの本館玄関前にありました。八高校舎の多くを焼いた1945年の空襲を逃れてここにあります。

ソテツから東へ目を転ざると、樹木に覆われた比較的大きな小山があります。これは元々全長50mの前方後円墳で、「八高古墳」と呼ばれています。ただ残っているのは後円部のみで、前方部は八高の学生食堂が建てられたため失われました。 [協力：公立大学法人 名古屋市立大学]



2	3	4	5
1	6		

- 1 名市大滝子（山の畑）キャンパス配置図。
- 2 滝子キャンパスのクスノキの巨木。
- 3 剣ヶ森全景。これも古墳（円墳）であり、八高古墳（写真6）の陪塚にあたる。
- 4 八高青春像。1988年に八高創立80周年を記念して建立された。座台には、八高の代表的な寮歌の一節からとった題字「わが友 若き旅人よ」が刻まれている。
- 5 滝子キャンパスのソテツ。空襲で黒こげになったが蘇生し、1978年にはここへ植えかえられた。
- 6 八高古墳（後円部）。5世紀中頃の築造と考えられている。